

科目名	途上国社会経済論	2単位
担当者	秋吉 恵	
テーマ	途上国の地域社会における課題解決に向けた組織化のプロセスを理解する視点を持つ	
科目のねらい	<p><キーワード> 地域社会開発 住民組織 資源動員 組織対応 規範形成</p> <p><内容の要約> 本科目では、発展途上国における多様な地域社会において、住民の参加を働きかける上で不可欠な地域社会の組織力を理解することを目的とする。途上国社会を理解する上で、地域社会の組織力に着目する理由を知り、複数の事例を通して、多様な国々の地域社会における住民組織化の仕組みを見つける方法を学ぶ。</p> <p><学習目標> ・途上国の地域社会の組織力とは何かを理解する。 ・途上国の地域社会における住民組織化の仕組みを見つける方法を理解する。 ・各人のそれまでの現場の経験や実践事例を相対化するための視点を持つことができる。</p>	
授業の進め方	<p>履修生は、テキストが提示された回はテキストを事前に読み込んで授業に臨み 1. テキストでわからなかった言葉や状況など素朴な疑問を出し合い、答え合う。2. テキストを読んで新たに気がついたことを出し合い、その気づきに対する気づきを話し合う。一つの章を2週間かけて学ぶ。テキストが提示されていない回は、それまでの学んだことを踏まえて、提示された「問い」について考えたことを話し合う。受講生は分担して各回のファシリテーターを担うとともに、素朴な疑問、気づき、考えを積極的に発言することが期待される。なお、第1章を扱う第2回、第3回の期間に、受講生と日程調整ができれば、第1章を踏まえてオンラインでの講義&対話を試みたい。日程調整は第1回授業期間に行う。</p> <p>第1回 オリエンテーション：本科目の狙いと、教員および各受講生について共有する。 第2回 「地域社会と開発とは」を読む 第3～4回 地域社会の把握 第5～6回 地域課題の担い手の把握 第7～8章 課題に関わる資源の動員・配分の把握 第9回 「地域開発における住民組織化と地域社会」を読む 第10～12回 外部インパクトに対する地域の反応を、事例をもとに読み解く 第Ⅲ部 まとめ 第13～15回 学びのふりかえり：本科目で学んだ新たな視点を持って、履修生それぞれが興味を持つ地域社会について、そこに内在する仕組みを掴むための準備<期末レポート執筆に向けた意見交換></p>	
事前学習の内容・学習上の注意	<ul style="list-style-type: none"> 各回の担当者は、ファシリテーターとして、それぞれの章及び週のテーマに応じた投げかけを投稿し、受講生間の意見交換が進むよう心掛ける。 第1回授業で受講生は各自、ファシリテーターを担当したい回を選ぶので、希望を考えておくこと。 各回で取り上げられるテキストを、事前に読み込み、その内容に対する自分の経験や知識に基づくコメントを掲示板に提示する。（この場合の経験は、必ずしも途上国に関わることである必要はない） 受講生は、自らが研究対象としている国や地域、人々を念頭において、課題や議論に参加することが望まれる。 	
本科目の関連科目	開発研究入門、地域社会開発論、開発組織・制度論、コミュニティ開発	
テキスト	テキストは使わず、必要な資料を資料ページに提供もしくはWeb上から入手するよう指示します。テキストを示していない回には、各履修生による調査や、それまでの授業内容を踏まえて授業を進めます。	

	授業の進め方第2回、第9回に「 」で示してある論考は、参考文献に掲載されています。第10～12回で扱う事例に関わる論考と合わせて、授業開始前に提示します。
参考文献	重富真一編著『地域社会と開発 第3巻—住民組織化の地域メカニズム—』古今書院 余語トシヒロ, 重富真一共著『地域社会と開発第2巻—地域分析と行動計画の枠組み』古今書院 エステル・デュフロ(2010, 2017 邦訳)『貧困と闘う知—教育、医療、金融、ガバナンス』みすず書房 アビジット・V・バナジー, エスター・デュフロ(2011, 2012 邦訳)『貧乏人の経済学 もういちど貧困問題を根っこから考える』みすず書房 黒崎卓, 栗田匡相(2016)『ストーリーで学ぶ開発経済学—途上国の暮らしを考える』有斐閣
成績評価方法と基準	各受講生による各回の議論への参加度 (40 点) 各受講生がファシリテーターを担当する回での疑問点、コメントの提示を踏まえた議論の活発度、 (30 点) 期末レポート (30 点)

科目名	開発組織・制度論	2単位
担当者	砂原 美佳	
テーマ	行政・政策論の視点から開発協力の諸問題について考える	
科目のねらい	<p><キーワード> ガバナンス、法と開発、比較法文化</p> <p><内容の要約> 本授業では、開発実践の最終目標とされる「組織化」や「制度化」（ルールの策定、運用上の課題、組織学習など）をめぐる既存理論や事例を検討し、今日的な課題について分析する力を養います。</p> <p>制度とは、ある価値を反映・実現するシステムです。日本を例にとると、民主主義という価値をもとに法制度が整備され、法治行政の原理に基づき、議会が制定した法律によって行政活動（組織活動）が進められています。こうした意味で、制度は組織活動の土台となります。一方、国際社会には、社会主義や共産主義など、異なる価値観や統治原理を前提とする国も存在します。コロナ禍を機に民主主義の限界が議論されるようになりましたが、制度の違いはどのように「開発」に影響を与えているのでしょうか。</p> <p>さらに、開発協力は単に資金や技術を提供するだけではなく、現地の社会や組織が自律的に機能するための制度設計や組織づくりも含まれます。こうした組織化・制度化のプロセスを踏むことで、協力相手との対等かつ持続的な関係を構築できるようになります。そのため、異なる制度的背景や社会的文脈を理解し、それに即した制度や組織のあり方を考えることは、開発学の重要な課題の一つです。</p> <p>本授業は、15回の講義を次の2つのパートに分けて進めます。</p> <p>(1) 共通資料（適宜お知らせします）を読み解き、議論するパート 開発に関連する組織・制度の現代的課題を学び、理解を深める。</p> <p>(2) 事例を用いた検討パート 受講生が自身の問題関心に基づく事例を持ち寄り、組織化・制度化の過程やその成果を共有・検討する。</p> <p><学習目標> 本講義は、本研究科のディプロマポリシーが示す「国際社会開発領域の基礎的かつ実践的課題に取り組みながら、関連領域の基礎的知識を理解できる」および「各人のそれまでの現場の経験や実践事例を、相対化し、開発学の枠組み（理論や方法）によって体系化／総合化することができる」ことを念頭に、次の2点を目標とします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 開発協力をめぐる課題の背景や構造について理解する。 ・ 現場の経験や実践事例の短期的・長期的影響について考えることができる。 	
授業の進め方	<p>本授業は、大きく前半（第2回～第10回）と後半（第11回～第14回）の二部構成とします。前半では、制度論（主に「法分野」の国際協力）に関わる共通資料や基礎的文献を読み、制度を「概念として理解する段階」から「具体的事例として捉える段階」へと段階的に理解を深めます。後半では、受講生自身の関心や問題意識をもとに、具体的な事例・テーマを取り上げ、制度・ガバナンスの視点から検討・議論する予定です。</p> <p>複数の参考文献や事例を扱うため、以下に示す授業構成はあくまで目安です。実際の進行方法、各回で扱う文献の範囲やテキストの選定、事例の取り上げ方については、第1回オリエンテーションにおいて説明したうえで、その後は受講生の関心・理解度・問題意識に応じて柔軟に調整します。</p> <p>*なお、前半（第2回～第10回）は、共通資料を読み、論点を整理する回と、受講生からの投稿やコメントをもとに論点を掘り下げて議論する回を組み合わせながら</p>	

	<p>進めます。</p> <p><授業の進行例（参考：昨年度のスケジュール）></p> <p>第1回 はじめに（オリエンテーション） 第2・3回 制度とは何か（見える制度と見えない制度） 第4回から第8回 制度の「かたち」（世界の「法体系」とそれぞれの特徴など） 第9回から10回 「法と開発」をめぐる論点 第11回～第14回 事例・テーマの検討（受講生の関心に基づく） 第15回 まとめ・振り返り</p>
事前学習の内容・ 学習上の注意	<p>できる限り受講者全員が出席できるよう調整し、4月の授業開始前後と最終授業前後の2回、「オンライン」にて交流をはかる予定です。掲示板でご連絡します。</p>
本科目の 関連科目	
テキスト	<p>テキストは用いません。適宜、掲示板などで資料を共有します。</p>
参考文献	<p>① 佐藤仁『開発協力のつくり方—自立と依存の生態史』東京大学出版会，2021年。（シリーズ「日本の開発協力史を問いなおす」7）</p> <p>② Trubek, David M. (2016). <i>Law and Development 50 Years On: The Dynamics of the Field</i>. University of Wisconsin Legal Studies Research Paper No. 1212.</p> <p>その他、適宜指示します。</p>
成績評価方法 と基準	<p>最低限の回数の発表と議論への参加を前提に、事前学習・受講態度(40%)、期末レポート(60%)を総合的に勘案して評価します。</p>

科目名	地域社会システム論	2単位
担当者	功能聡子	
テーマ	地域社会システムとソーシャルイノベーション	
科目のねらい	<p><キーワード> 地域社会、システム、システム思考、ソーシャルイノベーション、持続可能性、レジリエンス、コモンズ、ステークホルダー、コレクティブインパクト</p> <p><内容の要約> 現代社会は、グローバル化と技術革新を背景に物質的な豊かさと経済発展を享受する一方で、格差の拡大、気候変動や生物多様性の危機、紛争などの課題に直面している。他方、社会課題解決の担い手は、政府や公的機関、非営利団体に加えて、企業やソーシャルビジネスなど新たな主体が生まれており、民間資金への期待も増加している。本講義では、地域社会を複雑なシステムとして捉え、その構造とダイナミクスを理解することを目指す。特に、地域社会における課題解決や価値創造の手段として注目されるソーシャルイノベーションに焦点を当て、「システム思考」の理論と実践を通じて、持続可能な地域社会の実現に向けた考察を深める。また、自分はどういう未来を実現したいのか、そのために必要な資源は何か、どのような役割を果たすべきか、についても考察する。</p> <p><学習目標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域社会をシステムとして捉え、その構成要素と相互作用を理解できる。 ・ システム思考の基本的な概念とツールを習得し、地域社会の課題分析に活用できる。 ・ ソーシャルイノベーションの概念、種類、プロセスを理解し、地域社会への応用可能性を考察できる。 ・ 国内外のソーシャルイノベーション事例を分析し、成功要因と課題を抽出できる。 ・ 地域社会の課題解決に向けたソーシャルイノベーションのアイデアを構想し、提案できる。 ・ 自身の専門分野や経験を活かし、地域社会の課題解決に貢献できる。 	
授業の進め方	<p>第1回：導入 第2回：なぜ、今サステナビリティが重要なのか？ 第3回～第5回：システム思考の基本概念とシステムの構造 第6回～第8回：地域社会システムとサステナビリティの課題に関する議論 ・ 履修者は自らの経験等を踏まえて、地域社会をシステムとして捉え、サステナビリティの課題を分析、発題し、議論する 第9回～第11回：地域社会におけるソーシャルイノベーション ・ 履修者は、参考文献、あるいは、具体的な事例をもとに分担して話題提供を行う。ソーシャルイノベーションは、既存の社会システムに対してどのような変化をもたらすか、事例から学ぶと共に、新たな主体やエコシステム、コレクティブインパクトなどについても議論を深める。 第12回～第14回：社会の再構築への挑戦と求められるリーダーシップ ・ 履修者は、未来の地域社会のビジョンと、そのビジョンを達成するために必要なソーシャルイノベーション、必要な資源や行動について考察し、議論する。 第15回：まとめ</p> <p>原則として、WEB 掲示板での議論を行う。</p>	

事前学習の内容・ 学習上の注意	国内外のどの地域であれ、地域社会と関わって仕事をしたことのある人は、ご自身の経験を整理しておいてください。
本科目の 関連科目	
テキスト	<ul style="list-style-type: none"> ・ ドメラ・H・メドウズ著「世界はシステムで動くー今起きていることの本質をつかむ考え方」英治出版 2015年 ISBN978-4-86276-180-4 ・ スタンフォード・ソーシャルイノベーション・レビュー・ジャパン (2021.8) 「これからの「社会の変え方」を、探しにいこう。」英治出版 <p>セッションのテーマに関連する論文などを適宜指定します。</p>
参考文献	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大森佐和／西村幹子編著「よくわかる開発学」ミネルヴァ書房 2022年 ISBN978-4-623-09455-4 ・ ドメラ・H・メドウズ著「世界はシステムで動くー今起きていることの本質をつかむ考え方」英治出版 2015年 ISBN978-4-86276-180-4 ・ デイヴィッド・ピーター・ストロー著「社会変革のためのシステム思考実践ガイド」英治出版 2018年 ISBN978-4-86276-242-9 ・ 「Earth for All 万人のための地球: 『成長の限界』から50年 ローマクラブ新レポート」丸善出版 2022年 ISBN 978-4-621307670 ・ 亀山貴一著「豊かな浜の暮らしを未来へつなぐ」東北復興文庫 2020年 ISBN978-4-9909704-2-0 ・ スタンフォード・ソーシャルイノベーション・レビュー・ジャパン (2021.8) 「これからの「社会の変え方」を、探しにいこう。」英治出版 ・ スタンフォード・ソーシャルイノベーション・レビュー・ジャパン vol.01 (2022.1) 「ソーシャルイノベーションの始め方」英治出版 ・ スタンフォード・ソーシャルイノベーション・レビュー・ジャパン vol.02 (2022.6) 「社会を元気にする循環」英治出版 ・ スタンフォード・ソーシャルイノベーション・レビュー・ジャパン vol.03 (2022.11) 「科学技術とインクルージョン」英治出版 ・ スタンフォード・ソーシャルイノベーション・レビュー・ジャパン vol.04 (2023.4) 「コレクティブ・インパクトの新潮流と社会実装」英治出版 ・ スタンフォード・ソーシャルイノベーション・レビュー・ジャパン vol.05 (2023.9) 「コミュニティの声を聞く。」英治出版
成績評価方法 と基準	担当者あるいは指定討論者としての参加・発表 (30%)、ディスカッションへの参加度 (30%)、提出レポート (40%) を総合的に勘案して評価します。

科目名	開発経済論	2単位
担当者	池見 真由	
テーマ	途上国の人びとの暮らしから考える開発と経済と貧困	
科目のねらい	<p><キーワード> 開発経済学、貧困、途上国、国際協力、住民参加型開発</p> <p><内容の要約> 指定テキストを基に講義を進めながら、現場でのケーススタディも積極的に取り入れ、受講生と教員あるいは受講生同士の自由かつ活発な議論、情報共有、意見交換を行う授業を展開します。</p> <p><学習目標> 経済学の理論と実践を途上国における貧困や開発の問題に適用することができる。開発経済と国際協力に対してグローバルな感覚と多角的な視野で捉えて考えることができる。</p> <p>途上国の経済問題について現地の人びとの目線や立場に寄り添いながら、様々な事例を通じて包括的に理解することができる。</p>	
授業の進め方	<p>第1回 ガイダンス、自己紹介、授業計画①</p> <p>第2回 開発経済論とは、途上国の現状、授業計画②</p> <p>第3回 序章：プロローグ～ある途上国のお話</p> <p>第4回 農業：伝統的制度に秘められた知恵</p> <p>第5回 農村信用市場：多様化する農村経済とマイクロファイナンス</p> <p>第6回 教育と健康：人づくりは国づくり</p> <p>第7回 労働移動：バラ色の新天地？</p> <p>第8回 経済成長と工業化：グローバル化した世界</p> <p>第9回 技術移転：学びの道も一歩から</p> <p>第10回 開発金融：おらが村とグローバル金融システムのつながり</p> <p>第11回 開発援助：がんばれニッポン</p> <p>第12回 持続可能な開発：環境と開発の対立を超えて</p> <p>第13回 補論1, 2：書を捨てよ、現場へ行こう</p> <p>第14回 終章：エピローグ～途上国の希望、Column①～⑩</p> <p>第15回 まとめ</p>	
事前学習の内容・学習上の注意	<p>事前学習としては、授業毎にテキストの該当章を読み、予習をしてもらいます。受講生同士で役割分担を決めて、担当に当たった章の内容要約、意見・考察、追加で調査したことなどをまとめて発表してもらいます。テキストの発行年および扱われているデータは若干古いのですが、解説されている普遍的な基礎理論をベースに最新の情報や統計データを自ら収集し、現在の動向と照らし合わせながら実状に適った知識と教養を身につけます。復習に関しては、授業中に指示される内容の他、関連する文献やWebサイトなどを自主的に調べて情報収集することをお勧めします。また、国際情勢（経済・政治・社会・環境・紛争）などに関するニュースを毎日チェックしましょう。基本的には、毎回の授業に積極的に参加してもらい、そこで新たな知見や学び、更なる興味関心を引き出してもらうことが第一と考えています。</p>	
本科目の関連科目		
テキスト	黒崎卓・栗田匡相（2016）『ストーリーで学ぶ開発経済学』有斐閣ストウディア	
参考文献	<p>戸堂康之（2021）『開発経済学入門 第2版』新世社</p> <p>ジェットロ/アジア経済研究所・高橋和志・黒岩郁雄・山形辰史（2015）『テキストブック開発経済学 第3版』有斐閣ブックス</p>	
成績評価方法と基準	<p>・授業への参加状況：60%</p> <p>・発表内容/期末レポート：40%</p> <p>以上の割合で評価を行い、総合点60%以上を合格（単位認定）基準とします。</p>	

科目名	開発のミクロ経済学	2単位
担当者	功能聡子	
テーマ	持続可能な社会の実現に向けた開発とファイナンスのあり方	
科目のねらい	<p><キーワード> 貧困、気候変動、ジェンダー、持続可能性、ソーシャルイノベーション、ソーシャルビジネス、持続可能なファイナンス、インパクト投資、社会的投資、連帯経済、</p> <p><内容の要約> グローバル化、価値観の多様化が進み、開発課題は複雑化している。開発の現場における課題をミクロ経済学の視点から分析し、持続可能な社会の実現に向けた開発とファイナンスのあり方について考察する。ソーシャルイノベーションによる課題解決の新たな潮流や、社会的投資を中心に多様なソーシャル・ファイナンス手法について、基本的な概念、事例、評価の枠組みなどについて学び、開発の現場において活かしていくための土台形成を行う。</p> <p><学習目標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 開発の現場を新たな視点から分析し、サステナビリティの課題を再考することができる ・ 貧困問題やその他の開発課題に対して、ミクロ経済学的な分析やソーシャルイノベーションの視点から、分析、評価、提案できる ・ ソーシャルビジネス、インパクト投資、連帯経済などの概念を理解し、それぞれの特徴や可能性、課題を説明できる ・ サステナブルファイナンスの歴史、重要性について理解し、自身の役割を見直すことができる 	
授業の進め方	<p>第1回：導入 第2回：なぜ、今サステナビリティが重要なのか？ 第3回～第6回：貧困、環境問題をとらえる視点と対応 ・ 人的資本：教育、健康、情報、金融、環境、他 ・ 履修者は自らの経験等を踏まえて、貧困、環境問題をどのように捉えて、対応してきたかを分析、発題し、議論する 第7回～第9回：ソーシャルイノベーションとソーシャルビジネス ・ 履修者は、参考文献、あるいは、具体的な事例をもとに分担して話題提供を行い、議論する。 第10回～第12回：持続可能なファイナンスの歴史と背景、手法：社会的投資、インパクト投資、連帯経済、その他 ・ 履修者は、参考文献、あるいは、具体的な事例をもとに分担して話題提供を行い、議論する。 第13回～第14回：持続可能なファイナンスの実践と評価における課題 ・ 履修者は、参考文献、あるいは、具体的な事例をもとに分担して話題提供を行い、議論する。 第15回：まとめ</p> <p>原則として、WEB 掲示板での議論を行う。</p>	

事前学習の内容・ 学習上の注意	国内外のどの地域であれ、社会開発、経済開発の現場の経験のある人は、ご自身の経験を整理しておいてください。
本科目の 関連科目	マイクロファイナンス論
テキスト	<ul style="list-style-type: none"> • A.V. バナジー&E. デュフロ著「貧乏人の経済学」みすず書房 2012年 ISBN978-4-622-07651-3 • 須藤奈応著「インパクト投資入門」日経 BP 2021年 ISBN978-4-532-11443-5 • スタンフォード・ソーシャルイノベーション・レビュー・ジャパン (2021.8) 「これからの「社会の変え方」を、探しにいこう。」英治出版 2021年 ISBN978-4-910602-00-4 <p>セッションのテーマに関連する論文などを適宜指定します。</p>
参考文献	<ul style="list-style-type: none"> • 大森佐和／西村幹子編著「よくわかる開発学」ミネルヴァ書房 2022年 ISBN978-4-623-09455-4 • 黒崎卓、山形辰史著「開発経済学」(増補改訂版)日本評論社 2017年 • A.V. バナジー&E. デュフロ著「貧乏人の経済学」みすず書房 2012年 ISBN978-4-622-07651-3 • エステル・デュフロ著「貧困と戦う知」みすず書房 2017年 ISBN978-4-622-07983-5 • 池本幸生、松井範惇編著「連帯経済とソーシャルビジネス」明石書店 2015年 ISBN978-4-7503-4165-1 • 須藤奈応著「インパクト投資入門」日経 BP 2021年 ISBN978-4-532-11443-5 • スタンフォード・ソーシャルイノベーション・レビュー・ジャパン (2021.8) 「これからの「社会の変え方」を、探しにいこう。」英治出版 2021年 ISBN978-4-910602-00-4
成績評価方法 と基準	担当者あるいは指定討論者としての参加・発表 (30%)、ディスカッションへの参加度 (30%)、提出レポート (40%) を総合的に勘案して評価します。

*過年度（2018年度まで）に「参加型開発論」で単位取得をした場合は、「コミュニティ開発」を履修することはできません。

科目名	コミュニティ開発	2単位
担当者	野田 直人	
テーマ	外部者が計画を立てて主導する開発アプローチは、不確かな仮説が入りやすく機能しない場合が多い。外部者は、当事者が主体となる参加型開発をサポートする役割を担うべきである。	
科目のねらい	<p><キーワード> 参加型開発、内発的開発、住民主体、仮説のマネジメント</p> <p><内容の要約> 参加型開発は言葉やイメージが先行し、手法やツールを駆使して住民の参加を促すことだと思われがちだが、そうではない。住民にとっては生活そのものが開発のプロセスでありそこに外部者がどうかかわり、交わりを持つか、その時に外部者がどのように考え、どのような態度をとるかが参加型開発でもっとも重要な点である。参加型開発の意味を理解するために、まず発展途上国におけるコミュニティの状況について理解する。開発協力の流れの中から、どのようにして参加型開発の概念が生まれてきたかを学ぶ。さらに住民の主体的参加とは何であるかを考え、その障害となる「専門家（受講生）の思い込み」に焦点を当て、パラダイムシフトの実現を試みる。また、コミュニティにおいて参加型開発を実践する際に必要となる、実践的な社会経済学的な基礎知識を身につける。その結果、自らの業務で対象地域となる社会に関する分析や、プロジェクトの方法論の分析ができるようになることを目指す。</p> <p><学習目標> 開発協力の前提となる発展途上国のコミュニティの特質を理解する。 参加型開発の意味と外部者の役割を理解する。 計画に伴う仮説の分析ができる。 コミュニティ開発における基礎的な社会・経済的な分析ができる。</p>	
授業の進め方	第1回 地域コミュニティとは 第2回 地域コミュニティ開発で優先すべきこと 第3回 参加型開発とは 第4回 参加型開発における外部者の役割 第5回 仮説分析の説明 第6回、7回、8回 仮説分析の演習 第9回 仮説と参加型 第10回 仮説分析の演習 第11回 仮説を避けるためのアプローチ 第12回 参加型開発のアプローチ 第13回 地域コミュニティ開発の社会経済学 第14回 PRRIE モデル 第15回 質疑応答と課題の解説	
事前学習の内容・学習上の注意	講義開始時に指定のテキストを通読すること。 参考文献の内どれか少なくとも一冊を読むことが望ましい。	
本科目の関連科目		
テキスト	『地域コミュニティ開発 参加型開発・コミュニティの社会経済』（国際協力の教科書シリーズ5）	

*過年度（2018年度まで）に「参加型開発論」で単位取得をした場合は、「コミュニティ開発」を履修することはできません。

参考文献	1. 『参加型開発と国際協力：変わるのはわたしたち』ロバート・チェンバース著、明石書店、2000年 2. 『開発フィールドワーカー改訂版』野田直人著、有限会社人の森、2016年 3. 『機会均等の研修実施によるコミュニティ開発 PRRIEアプローチの基礎と実践』野田直人著、有限会社人の森、2017年
成績評価方法と基準	レポートのみで評価する。100点満点で60点以上を合格とする。講義の内容を正しく理解できていれば60点とし、自らの知見が加えられていたり、実際の案件の分析が正しく行われていたりすればその分を評価して加点する。提出されたレポートが論文の体裁をとっていない場合は10点を減点する。 レポートでは自らの経験や関係する実例を題材にすることが推奨されるが、該当する案件がない場合、適当な文献を選び、その分析を行うこととする。

科目名	開発評価論	2 単位
担当者	吉村 輝彦・功能 聡子	
テーマ	「評価」の考え方を改めて見つめ直し、同時に、「評価」を多面的に理解し、評価の視点から自身の取り組みのあり方を構想する。	
科目のねらい	<p><キーワード> 評価、参加、アウトカム、プロセス、マネジメント</p> <p><内容の要約> ・近年、政策、計画や事業・プロジェクトのマネジメント（進行管理も含めて）は、広く行われている。政策、計画や事業の実施過程を、定期的にモニタリングし、どれだけ個別施策や事業が実施され、どの程度計画目標や成果目標が達成されたのかということ、計画→実施→評価→改善という PDCA サイクルにおいて、継続的に「評価」していくことにより、効果的な実施と運用に取り組んでいこうとしている。実際には、「評価」は、幅広い領域で、その必要性と意義が認識され、様々な「評価」（「形成的評価」や「総括的評価」等）が行われている。 ・この「評価」に関しては、誰が、何のために、どのような射程を持って、どのような観点／視点から評価を行うのか、実際にどこまでのことが評価することができるのか等様々な論点がある。そして、参加型評価、協働評価、エンパワメント評価、社会的インパクト評価、発展的評価等、多様な評価のアプローチのありようが議論されている。さらには、VUCA の時代を見据えると、PDCA と対比される OODA ループ等様々なアプローチの考え方も理解しておく必要がある。他方で、「評価疲れ」という言葉が出てきている等、改めて評価自体のあり方を確認していく必要がある。 ・本科目では、「評価」の考え方を改めて見つめ直し、同時に、「評価」を多面的に理解し、評価の視点から自身の取り組みのあり方を構想する。</p> <p><学習目標> ・「評価」に関わる基本的な事項や現状を理解できる。 ・「評価」を多面的に理解し、どのように評価を活かしていけるのかを構想することができる。 ・「評価」の視点から履修者自身の視点や取り組みを相対化し、それぞれが直面している状況を深化させる機会にしていくことができる。</p>	
授業の進め方	<p>■第1回：ガイダンス</p> <p>■第2回～第4回：評価の定義やその意義をめぐる議論 #履修者が、自らの経験等を踏まえて、評価の定義や意義について発題し、その内容を共有するとともに、議論する。</p> <p>■第5回～第10回：配布資料や参考文献に基づく発表と議論 #配布資料やいくつかの参考文献を踏まえて、履修者が分担して話題提供を行い、それをもとに、評価の理論的及び実務的観点から評価のあり方を議論する。 #ここでは、参加型評価、協働評価、エンパワメント評価、社会的インパクト評価、発展的評価等、多様な評価のアプローチを理解していく。</p> <p>■第11回～第13回：参考文献や具体的な事例の評価文書に基づく発表と議論 #参考文献、あるいは、JICA等の事業やプロジェクトに関わる具体的な事例の評価文書をもとに、履修者が分担して話題提供を行い、評価の実践事例等を踏まえ、そこでの評価の考え方に焦点をあてて議論を進める。</p> <p>■第14回～第15回：これまでの振り返り</p>	
事前学習の内容・学習上の注意	<ul style="list-style-type: none"> ・関心がある参考文献を事前に読んでおくこと。 ・関心がある分野の評価の取り組みに関して、JICA等のプロジェクトでは、実際に行われているのか、その内容について事前に確認しておくこと。 ・日頃から「評価」に関わるトピックスを意識しておくこと。 	
本科目の関連科目	「国際社会開発の基礎」	

テキスト	<p>テキストは使わず、授業の進捗に合わせて、資料を提示する。 また、適宜、参考文献を参照する。</p>
参考文献	<p><参考文献></p> <ul style="list-style-type: none"> ・米原あき・佐藤真久・長尾眞文編著（2022.4）「SDGs時代の評価：価値を引き出し、変容を促す営み」筑波書房（2,500円+税） https://www.hanmoto.com/bd/isbn/9784811906256 ・ケネス・J・ガーゲン、シェルト・R・ギル著、東村知子＋・鮫島輝美訳（2023.2）「何のためのテスト？—評価で変わる学校と学び」ナカニシヤ出版（2,500円+税） https://www.nakani shi ya. co. jp/book/b619222. html ・ジェリー・Z・ミュラー著、松本裕訳（2019.4）「測りすぎ—なぜパフォーマンス評価は失敗するのか？」みすず書房（3,000円+税） https://www.msz. co. jp/book/detail/08793/ ・源由理子編著（2016.11）「参加型評価—改善と変革のための評価の実践」晃洋書房（2,700円+税）<品切> http://www.koyoshobo. co. jp/book/b311259. html ・三好皓一編（2008.1）「評価論を学ぶ人のために」世界思想社（2,000円+税）<絶版> https://sekai shi sosha. jp/book/b354089. html ・山谷清志監修、源由理子・大島巖編著（2020.12）「プログラム評価ハンドブック」晃洋書房（2,600円+税） http://www.koyoshobo. co. jp/book/b535755. html ・安田節之（2011.5）「プログラム評価—対人・コミュニティ援助の質を高めるために」新曜社（2,400円+税） https://www.shi n- yo- sha. co. jp/book/b455770. html ・安田節之・渡辺直登（2008.7）「プログラム評価研究の方法」新曜社（2,800円+税） https://www.shi n- yo- sha. co. jp/book/b455884. html <品切> ・文化庁×九州大学 共同研究チーム編（2021.7）「文化事業の評価ハンドブック—新たな価値を社会にひらく」水曜社（2,500円+税） http://sui yosha. hondana. jp/book/b584824. html ・文化庁×九州大学 共同研究チーム編（2021.3）「やってみよう！評価でひらく“社会包摂×文化芸術”ハンドブック」 http://www.sal. desi gn. kyushu- u. ac. jp/publi cation/sal_ handbook_ 2020/ ・文化庁×九州大学 共同研究チーム編（2020.3）「評価からみる“社会包摂×文化芸術”ハンドブック」 http://www.sal. desi gn. kyushu- u. ac. jp/publi cation/sal_ handbook_ 2019/ https://www.bunka. go. jp/tokei_ hakusho_ shuppan/tokei chosa/pdf/92212901_ 03. pdf ・熊倉純子監修・編著、槇原彩編著（2020.3）「アートプロジェクトのピアレビュー：対話と支え合いの評価手法」水曜社（1,600円+税） http://sui yosha. hondana. jp/book/b498016. html ・日本政策投資銀行編（2020.1）「アートの創造性が地域をひらく」ダイヤモンド社（2,000円+税）<品切> ・ウェストリー他（2008.8）「誰が世界を変えるのか」英知出版（1,900円+税） https://ei ji press. co. jp/products/2036 ・池田葉月（2021.3）「自治体評価における実用重視評価の可能性」晃洋書房（2,800円+税） http://www.koyoshobo. co. jp/book/b559436. html ・塚本一郎・関正雄（2020.7）「インパクト評価と社会イノベーション」第一法規（2,900円+税） https://www. dai i chi hoki. co. jp/store/products/detail/103916. html ・塚本一郎・関正雄・馬場英朗（2023.10）「インパクト評価と価値創造経営」第一法規（3,400円+税）

	<p>https://www.daiichi-hoki.co.jp/store/products/detail/104764.html</p> <ul style="list-style-type: none"> ・藤島薫（2014.3）「福祉実践プログラムにおける参加型評価の理論と実践」みらい（2,800円+税）＜品切＞ ・大島巖・源由理子他編（2019.9）「実践家参画型エンパワメント評価の理論と方法」日本評論社（2,800円+税） <p>https://www.nippy.co.jp/shop/book/8129.html</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フェッターマン、ワンダーズマン編著、笹尾敏明監訳（2014.1）「エンパワメント評価の原則と実践」風間書房（3,500円+税） <p>https://www.kazamashobo.co.jp/books/book_29/</p> <ul style="list-style-type: none"> ・キャロル・H・ワイス、佐々木亮監修（2014.3）「入門 評価学」日本評論社（6,000円+税） <p>https://www.nippy.co.jp/shop/book/6471.html</p> <ul style="list-style-type: none"> ・NPO法人アユス編（2003.9）「国際協力プロジェクト評価」国際開発ジャーナル社（1,500円+税）＜絶版＞ <p><参考ウェブサイト></p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本評価学会： http://evaluation.jp.org #学会誌『日本評価研究』にアクセスが可能。 https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jjoes/-char/ja ・JICA 事業評価： #「途上国開発と事業評価（2023.6）」「JICA 事業評価ガイドライン（第2版）」「JICA 事業評価ハンドブック（Ver.2.0）」「別冊【2025】外部事後評価レファレンス」や事業評価年次報告書のダウンロードが可能。また、事業評価案件の検索が可能。 https://www.jica.go.jp/activities/evaluation/index.html ・外務省「ODA 評価」： #「DAC 評価基準」「評価実施案件・評価報告書」にアクセスが可能。 https://www.mofa.go.jp/mofaj/gai-ko/oda/kai-kaku/hyoka.html ・国土交通省「公共事業の評価」： https://www.mlit.go.jp/tec/hyouka/public/index.html ・国土交通省「都市再生整備計画事業評価の手引き」： http://www.mlit.go.jp/toshi/crd_machi_tk_000036.html ・総務省「政策評価ポータルサイト」： https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/hyouka/seisaku_n/portal/ ・Blue Marble Japan： #「Developmental Evaluation（発展的評価）の引き出し集」にアクセスが可能。 https://www.blue-marble.co.jp ・社会的インパクト・マネジメント・イニシアチブ（SIMI）： #リソース（ロジックモデルやツールセット他）にアクセスが可能。 https://simi.or.jp ・CSO ネットワーク： https://www.csonj.org ・Social Value Japan： http://socialvalue.jp.org
<p>成績評価方法と基準</p>	<p>原則として、担当者あるいは指定討論者としての参加（30%）、議論への参加度合い（30%）、そして、最終レポート（40%）を踏まえた評価を行い、全体で60%以上を合格とする。</p>

科目名	地域社会開発論	2単位
担当者	平野隆之	
テーマ	福祉社会の開発とマネジメント	
科目のねらい	<p><キーワード> 福祉開発、まちづくり、マネジメント、参加支援、重層的支援体制整備事業</p> <p><内容の要約> 福祉社会の開発を目指すための方法を、日本の政策動向（重層的支援体制整備事業をめぐる政策）を踏まえつつ、その開発を担う民間組織のマネジャーの実践事例をと通して理解する。活用する教材は、5つの地域における実践のフィールドワーク（参与観察）によりまとめられたものを活用することで、マネジャーのリアリティのあるマネジメントの内容を学ぶことができる。また、学習者はそのようなマネジメント視点から、学習者自身の実践を振り返ることができるための方法として、「レシピ作り」を提案している。</p> <p><学習目標> 福祉社会の開発を目指す開発方法は、国の新たな政策動向との対比のなかでどのような特徴をもつかを理解する。地域課題や特性の違いを踏まえつつ、生活しづらい人の社会参加の応援に焦点を当てた福祉開発マネジャーによる適切な選択を構造的に捉えることができる。福祉開発に関する自身の実践の振り返りに応用し、評価的な分析を進めることができる。</p>	
授業の進め方	<p>○テキストは、序章とⅠ部1～5章、Ⅱ部6～7章、終章と、9つの章によって構成されており、各章の順に授業を進める。ただし、日本の社会福祉や地域福祉の知識や政策動向の理解が必要な部分があるので、参考文献の①～③の内容をもとに、補足する学習の機会をテキストの各章の進展に応じて用意する。</p> <p>○第1は、序章と第1章を用いて、福祉開発および福祉開発マネジャーに関する基礎的な理解を進める。参考文献①をもとに編集された教材を活用し、「地域共生の開発福祉」の考え方との関連についての理解を深める。</p> <p>○第2は、第2章～第4章において、重層的支援体制整備事業における参加支援に着目し、「生活しづらい人の社会参加の応援」の実際とそのためのマネジメントを学ぶ。参考文献②をもとに編集された教材を活用し、地域福祉から地域共生社会へと進む日本の政策動向を理解する。</p> <p>○第3に、第5章を元に、判断能力の乏しい人の社会参加を権利擁護支援の視点から学ぶ。その人の社会参加を叶えるためには、意思決定支援が必要であり、そのための市民活動の意義を理解する。参考文献②の権利擁護支援に関する教材を用いて補足する。</p> <p>○第4には、第Ⅱ部の3つの社会参加の応援レシピの教材を用いて、福祉開発の実践を捉える意義を学ぶ。学習者の実践の振り返りに活用し、その意義を理解する。</p> <p>○第5に、終章において、これまでの4つのパートの学びを振り返り、福祉開発マネジメントの有効性を、実践のストーリーとレシピから理解する。また、国の重層的支援体制整備事業が求める相談支援・参加支援・地域づくり支援の「一体的な実施」に対応する方法として、福祉開発の方法が有効である点についての学びを深める。なお、参考文献③を用いて補足を行う。</p> <p>○レポート作成にむけて、学習者の実践に関する「レシピ作り」に取組み、その成果物の提出をもってレポートの作成とする。「レシピ作り」のレポート作成ができるように手助けを行う。</p>	
事前学習の内容・学習上の注意	テキストの5つの地域における関連の文献を紹介するので、目を通すことを心がける。	
本科目の関連科目	福祉社会開発演習	
テキスト	平野隆之編（2025）『福祉開発マネジャーは何を開発しているのかー社会参加の応援レシピ』（CLC）	

参考文献	①日本福祉大学アジア福祉社会開発研究センター編（2017）『地域共生の開発福祉－制度アプローチを越えて』（ミネルヴァ書房）。 ②平野隆之（2020）『地域福祉マネジメント－地域福祉と包括的支援体制』（有斐閣）。 ③平野隆之（2023）『地域福祉マネジメントと評価的思考－重層的支援体制整備の方法』（有斐閣）
成績評価方法 と基準	文献の講読による発表、議論への参加度（70%）、レポート（30%）の方法で行い、全体で60%以上を合格とする。ただし掲示板での投稿、議論に十分に参加されていることを、期末レポート提出の要件とする。

科目名	環境計画論	2単位
担当者	千頭 聡	
テーマ	主として環境の側面から、持続可能な開発と社会のあり方を考えよう。	
科目のねらい	<p><キーワード> 持続可能な開発(SD)、持続可能な開発のための目標(SDGs)、持続可能な開発のための教育(ESD)、環境共生、環境計画</p> <p><内容の要約> 2015年の国連持続可能な開発サミットにおいて持続可能な開発のためのアジェンダ(SDGs)が制定され、包摂型社会、経済発展、環境保全の3つの側面を踏まえた17の目標、169のターゲットが設定され、先進国、発展途上国ともに様々な取り組みが進められています。本講義では、これらの動きを整理してその意味を考えるとともに、環境に軸足を置きつつ、人間社会との関係性の中で環境をどうとらえ、環境資源をどう公正に活用していくべきなのかについて、根源的な概念を解きほぐした文献および近年の動向をもとに、皆さんと議論していきたいと思ひます。また、ESDの考え方と実践方法についてもテキストに基づいて議論したいと思ひます。</p> <p><学習目標> 持続可能な開発とSDGsおよびESD、環境資源の管理と利用に関する理念的な枠組みが理解できるとともに、環境に対する基本的な考え方を獲得することができる。</p>	
授業の進め方	<p>テキストのいくつかの章について、受講生で分担しながら、内容の紹介、議論すべきポイントの提起と受講生による議論により、環境計画という概念の共通理解を図ります。合わせて、院生自身の問題認識に基づき議論を深めていきます</p> <p>第1回 ガイダンス 第2回から第4回 環境に関わる国際的な動向、MDGsからSDGsへのまとめ 第3回から第8回 SDGsの目標に関わる議論 第9回から第12回 環境計画の概念と実際 第13回から第14回 ESDの理念と手法、進め方についての議論 第15回 まとめ</p> <p>なお、受講生の人数や関心領域に応じて、適宜、学習内容の変更やテキストの追加・変更を行います。</p>	
事前学習の内容・学習上の注意	<p>○テキストの担当章については、事前に精読のうえ、内容の要約、議論のポイントなどを他の受講生に示し、議論を誘発するように取り組むこと。</p> <p>○担当以外についても、あらかじめ一読し、自らの考え方をまとめておくこと。</p>	
本科目の関連科目	特に指定せず	
テキスト	<p>○名古屋市(2015)「ESDはじめての一步」(PDFファイルを配布予定)</p> <p>○末石富太郎+環境計画研究会(1993)「環境計画論」森北出版 (必要ヶ所のPDF化と配布を行う予定)</p> <p>○その他、適宜関連資料を配布予定</p>	
参考文献	<p>今後、随時、情報提供していきますが、たとえば以下のような書籍があります。</p> <p>○小宮山宏編(2008)「サステイナビリティ学への挑戦」岩波書店(2,900円)</p> <p>○松下和夫編著(2007)「環境ガバナンス論」京都大学学術出版会(4,200円)</p> <p>○井上真・宮内泰介編(2001)「コモンズの社会学」新曜社(2,400円)</p> <p>○三村信男他編(2008)「サステイナビリティ学をつくる」新曜社(2,900円)</p>	
成績評価方法と基準	原則として、担当者としての参加(40%)、議論への参加(30%)、最終レポート(30%)として、総合計で60%以上を合格とする。	